

Title	ダヴァンツァーティの貨幣論
Sub Title	B. Davanzati's theory of money
Author	丸山, 徹(Maruyama, Toru)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2010
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.102, No.4 (2010. 1) ,p.681(47)- 691(57)
JaLC DOI	10.14991/001.20100101-0047
Abstract	<p>深刻な流動性危機に悩む16世紀末葉のフィレンツェ。文運に恵まれた商人B・ダヴァンツァーティの残した講義録『貨幣論講義』は、近代的な貨幣理論の曙を告げる作品であるとともに、その基礎としてイタリアの古い効用理論を継承し、17世紀へ伝達する成果でもあった。この論文は『貨幣論講義』の主要内容を整理・紹介し、その意義を考える覚え書。</p> <p>Florence was suffering from a severe liquidity crisis in the end of the 16th century. "Lezione delle Monete," a transcript of lectures left by the culturally endowed merchant B. Davanzati, marked the dawn of modern monetary theory based on the old Italian utility theory. This lecture also played an indispensable role in the transmission of the Italian way of thinking to the 17th century.</p> <p>The present note intended to organize and introduce the main contents of the "Lezione delle Monete", and consider its significance.</p>
Notes	小特集：高橋誠一郎の経済学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20100101-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ダヴァンツァーティの貨幣論

B. Davanzati's Theory of Money

丸山 徹(Toru Maruyama)

深刻な流動性危機に悩む 16 世紀末葉のフィレンツェ。文運に恵まれた商人 B・ダヴァンツァーティの残した講義録『貨幣論講義』は、近代的な貨幣理論の曙を告げる作品であるとともに、その基礎としてイタリアの古い効用理論を継承し、17 世紀へ伝達する成果でもあった。この論文は『貨幣論講義』の主要内容を整理・紹介し、その意義を考える覚え書。

Abstract

Florence was suffering from a severe liquidity crisis in the end of the 16th century. “Lezione delle Monete,” a transcript of lectures left by the culturally endowed merchant B. Davanzati, marked the dawn of modern monetary theory based on the old Italian utility theory. This lecture also played an indispensable role in the transmission of the Italian way of thinking to the 17th century. The present note intended to organize and introduce the main contents of the “Lezione delle Monete”, and consider its significance.

ダヴァンツァーティの貨幣論

丸 山 徹

要 旨

深刻な流動性危機に悩む 16 世紀末葉のフィレンツェ。文運に恵まれた商人 B・ダヴァンツァーティの残した講義録『貨幣論講義』は、近代的な貨幣理論の曙を告げる作品であるとともに、その基礎としてイタリアの古い効用理論を継承し、17 世紀へ伝達する成果でもあった。この論文は『貨幣論講義』の主要内容を整理・紹介し、その意義を考える覚え書。

キーワード

フィレンツェの金融危機、貨幣の機能と材質、貨幣の価値、貨幣数量説、貨幣の改鋳

序・地獄のウゴリーノ伯

『神曲』地獄篇第三十二歌。ウェルギリウスに先導されたダンテは、裏切者が罰せられている地獄の第九の圏谷を訪れる。ひとつの穴の中にふたりの男が、一方が他方におおいかぶさるような姿で氷漬けになっている。上になった男は下の男の脳と^{うなじ}項の間に歯を立てて、むさぼり食おうとしている。ダンテが誰何すると、

く恐ろしい食物からその罪人は口を上へあげると、
後から喰いかけたその頭の
髪の毛で口もとを拭い、
おもむろに口を開いた……)(ダンテ [2] 第三十三歌)

そして「俺はもと伯爵ウゴリーノ、こいつは大司教ルッジェーリだ」という。

1288 年、ピサは法王党が権勢を誇り、大司教ルッジェーリ・デリ・ウバルディーニの率いる皇帝党を制していた。法王党は二派に分かれ、そのひとつはウゴリーノ・デルラ・ゲラルデスカが、いまひとつは孫のニーノ・デ・ヴィスコンティが率いていた。ウゴリーノは権力を一手に集中するため、ルッジェーリと結んでニーノを追放した。しかし、それがかえって法王党の弱体化を招き、ウ

ゴリーノはその子、孫とともに、ルッジェーリの謀に落ちて、投獄された（7月）。翌1289年2月、ガイド・ダ・モンテフェルトがピサの軍を掌握、牢獄の塔の鍵はアルノー川に投げ捨てられ、ウゴリーノらはそこに餓死するのである。（ダンテ [2] p.117）

飢餓の牢獄に幽閉されたウゴリーノたちにとって、わずかな食物と水とは何ものにもかえがたい貴重品であったろう。

くわずかな半粒の金を以て購われる卵は、牢獄のウゴリーノ伯の生命を十日間保つことができよう。しかしこの世のあらゆる財宝を併せてもこれを果たすことはできまい。穀物以上にわれわれの生活に深くかかわるものがあるだろうか。それにもかかわらず、その一万粒はたった一粒の金と引き換えに売却されるのである。〉(Davanzati [3] 12 節)

——このようなたとえを引いて、ものの価値・値段は、そのものによって満たされる人間の欲望や必要の強さと、その稀少性とに応じて定まると論じたのは、16世紀のフィレンツェにその学識をうたわれた、ベルナルド・ダヴァンツァーティである。

ダヴァンツァーティは商業一般にも通じ、数学も能くし、さらにはタキツスの翻訳者として、文運甚だめでたい人物でもあった。1588年、時の執政官 M. B. ヴァローリの求めに応じ、彼はフィレンツェの学士院で一場の講演を行なったが、それが今日『貨幣論講義』として残されている。先に引いた一節は、この講義録の一節である。思えば1588年は、ピサにおけるウゴリーノとルッジェーリの抗争から数えて、ちょうど300年目の年にあたる。

1620年代前後、イギリスではトマス・マン、イタリアではアントニオ・セルラなど、高橋誠一郎の所謂「本然の重商主義」の立場から経済問題に卓見を披露する論客が現われたことは周知のとおりであるが、それに先立つきわめて早い時期に、注目すべき先駆的な経済思想を語る人物が高橋の関心をひいた。イギリスではいまだに正体が不明の「W. S. ジェントルマン」、そしてイタリアではここで取り上げるダヴァンツァーティが代表的な実例である。

我が国の経済学史研究のなかで、ダヴァンツァーティを主題として扱った作品は殆ど見あたらない。私の知る限りでは高橋誠一郎の論文「ベルナルド・ダヴァンツァーティの貨幣論」上・下（『三田学会雑誌』第8巻第9-10号、大正3年）がただひとつの例外である。（その内容は高橋 [9] pp.242-251 に再録されている。）

フィレンツェの金融危機

そもそも小国の分立するイタリアの地は、異なる多種の貨幣が入り乱れて複雑な状況を呈していた。フィレンツェもその例外ではない。

16世紀の後半、良質のフィレンツェ金貨は流失がおびただしく、それを補うために銀貨の鑄造を

増加せざるをえず、同国は両本位制を採っていたにもかかわらず、殆ど銀の単本位制の如き状態となった。一方、預金通貨を基礎とする銀行からの貸出が活発となって、経済に信用の果たす役割が顕著となりつつあった。(以下 Cipolla [1] による。)

当時、寡占的な銀行業界のなかで最も抜き出した勢力を有したのはリッチ銀行であった。たとえば1562年3月-8月の期間に造幣局に持ち込まれた銀3,710キログラムのうち2,274キログラムがリッチ銀行からのものであったという。他の期間についても同様の記録が残っている。リッチ銀行はまことに「万人の財布」(everyone's cashier)と称される力を有していたのであった。リッチ銀行の繁盛はコジモ・デ・メディチの時代にリッチ銀行の総帥フェデリーゴが殆ど無償でコジモへの財政援助を与え、これを多としたコジモが共和国の資金管理をリッチ銀行に委ねたことに始まる。

リッチ銀行は巨額の預金を基礎とした信用貸出を活発に行なった。他の銀行もこれと競合して貸出競争を演じたため、1560年代以降、フィレンツェの経済は拡大の道を駆け上っていった。しかし貸出競争はやがて過剰となった。

預金者からの引き出し要求に応じられなくなったリッチ銀行は小切手の如き証書を預金者に振り出して、これを他行甲に持参せしめ、支払いを甲銀行に代行せしめる方法を探った。しかし甲もそれに応じられず、他の銀行乙宛の小切手を振り出すといった事態が頻繁に起こり、預金者はたらい回しのあげ句、ついに現金を手に入れられない、あるいは幸い現金を手にしえたにせよ、相当の打歩を差し引かれた額で満足せざるをえないこともあった。小切手によるたらい回しは「インクでの支払い」(payment in ink)と皮肉な呼称を与えられている。共和国中で必要な資金が手にはいらず、絹・毛織物職人の給料支払日である毎土曜日にさえ資金が滞った。これは流動性危機である。

1573年、リッチ銀行頭取フェデリーゴが歿し、そのあとをアッキアイウォーリが継いだ。しかしアッキアイウォーリも1575年に歿する。

フェデリーゴ歿後、リッチ銀行にかわって共和国の資金管理を委ねられたストロツィ銀行頭取のキャンビは強硬に、リッチ銀行への預け入れを禁止し、併せて「インクでの支払い」も禁じた。この背景には両大銀行間の年来の不和があったという。つまりストロツィ銀行が深い商縁のあったルッカへ高額な現金送付が必要となり、リッチ銀行へそのための融資を要請したとき、アッキアイウォーリは幾度かそれを拒絶し、キャンビに煮湯を飲ませたことがあったと伝えられており、キャンビの強硬な施策はそれに対する報復であろう。

しかしこの措置はフィレンツェの流動性危機をますます深刻な状態に追い込み、ついに大公フランチェスコはジェノアや教皇領の貨幣を共和国に流通せしめることを認可するまでになった。

かくして1580年代をつうじて、フィレンツェは極端な金融危機に苦しんだのである。ダヴァンツァーティがその見解を求められたのは、まさにこの渦中においてであった。

金銀の奇跡

ダヴァンツァーティの価値論は、その貨幣論の基礎として考察されたものであった。この時代に他の欧州諸国にまして政治的混乱と経済界の困窮に悩みつつあったイタリアに、その救済の途を探る経済論が数多く生み出されたことは偶然ではない。イタリアは「最悪なる貨幣と最良なる通貨論」とを有する国と称せられ、しかもその論壇に活躍した多くは商人であったことも注意されてよい。ガスパロ・スカルッフィ然り、ダヴァンツァーティもまた然りであった。

古来、金銀等の貴金属は、他の金属にない優れた特性をもち、それゆえに人を魅了し、奇跡を連想させる力を秘めていた。光輝と色彩において太陽と月に比せられ、その堅牢なること、火に焼けず錆に損なわれることもなく、また虫にも腐敗にも冒されない。使用による摩損も軽微である。しかも薄く、細く引き伸ばすことが可能である。

〈金銀はその中に何か神的なものを有する。少なくともあるインドの人々はそう考えて、古い迷信から、金を採掘するときには断食し、他のすべての快樂とともに婦人との交りを断っている。〉(Davanzati [3] 1 節)

アルゴスの王アクリシウスの娘ダナエは、父によって青銅の塔中に幽閉されていたが、彼女を恋するゼウスは金の俄雨となって彼女のひざに降りそそぎ、恋を遂げてペルセウスが生まれた。また

〈リディアの羊飼いがジーズは洞窟を歩いていた折に見出した死人の指から金の指輪をぬきとり、それを自分の指にはめると、彼の姿はたちまち目に見えぬようになったといわれる。彼は王の寝所へ忍び入って王妃を歓喜せしめ、彼女の手引きでその夫を殺して、王国を我が物にしたと伝えられている。〉(Davanzati [3] 2 節)

ダヴァンツァーティは古い物語の数々を語りながら、金銀の不思議な力、その奇跡を信ずる人間の心を描き出した。

そしてそれこそが金銀をして貨幣の素材たらしめる特性なのである。

分業—市場—貨幣

人は生きるために分業する。人はその適性に応じて生産活動を行ない、自らの必要を超えた余剰を相互に交換する。また地域によっても、各種の産物の産地としての適・不適がある。各地はそれに適した産物を豊かに生み出し、相互に余剰を交換する。

くそれゆえ、人は自らのためだけに労苦するのではなく、労苦は他人のためでもある。また他人も相互的に彼のために働くのである。ある都市は他を助け、ひとつの国はその余剰を他に手放し、そのかわりにその欲するものを他から与えられるのである。こうして自然のものにせよ、人のつくり出したものにせよ、すべての良きものは人間の通商・交易をつうじて取引され、享受されるのである。)(Davanzati [3] 4 節)

このようにして生まれる交易の最も単純な形態が物々交換である。

当初は偶然的、散発的に行なわれていた物々交換に、やがて市場・祭市という制度が工夫され、売手も買手も自らの取引相手を見出すことがはるかに容易になった。まことに「必要は発明の母」である。

しかし A、B 二者の間に物々交換が行なわれるためには、A の売ろうとするものを B が欲し、また B の売ろうとするものを A が欲していなければならない。つまり欲望の二重の一致が必要である。市場の制度ができて、まだこの困難が解決されたわけではない。そこで誰れもが売却した物品の見返りとしてよこんで受領する、つまり普遍的受領可能性を有する交換の媒介手段が、やがて発見されるのである。

くこの便宜によってかれらの目は開かれ、ちょうどかつて特定の場所を選んだように、他のすべてのものと等価値を担うべきあるひとつのものを指定するという、より大きな発見に到ったのである。あらゆるものが指定されたものの一定量に対して授受せられること、それはあたかも種々なる内容や意匠をもった事物の普遍的価値を仲立ちし、あるいはそれが流れ出る源泉であったかの如くである。)(Davanzati [3] 5 節)

金・銀を媒介して交換を行なうに際して、はじめはその都度、金属を秤量して支払いがなされたが、これでは甚だ煩しい。そこであらかじめ、金属の純度を試験し、正確に秤量し、品位量目を保証する刻印が押されることになった。これが貨幣である。

ダヴァンツァーティは多くの史的事実を挙示して、貨幣の生成を論じた。(Davanzati [3] 6-8 節。)

イタリアにおける近世経済学の完成者ともいべきナポリ人の F・ガリアーニもまた『貨幣論』(1750)のなかで貨幣の生成と機能について詳しく論じているが、ダヴァンツァーティの物々交換モデルとはちがって、一種のワルラス的な市場が構想されている点に特徴がある。

つまり各主体は市場あるいは取引所へ供給・販売する財を持ち込み、取引所からいかなる財を何程ずつ搬入したかを証明する書き付けを受け取る。取引所に集積された財は適当に価格づけされ、主体はそれを需要・購買するのであるが、そのとき書き付けに記された彼の販売量を価格で評価した価値額が彼に許される購買力にはかならない。この書き付けがガリアーニの構想する貨幣である。

ダヴァンツァーティが貨幣の素材としてはじめから貴金属を考えているのに対し、ガリアーニの

貨幣は単なる紙の書き付けである。しかしこれはガリアーニにとっても理念上の貨幣にすぎなかった。実際上の貨幣はまず固有の価値をもつものでなければならぬ。外国人や遠く離れた取引相手は固有の価値をもたぬ書き付けを信用し、受領しようとはしないであろう。さらに貨幣は一様な材質と、分割可能性を具え、価値の計算が容易に行ないうる資質を具えていなければならない。しかも偽造しにくく、耐久性にも恵まれていなければならない。これらすべての要件を満たす実際上の貨幣の素材は、ガリアーニにとってもやはり貴金属に帰着するのであった。

貨幣の定義

ここであらためて、貨幣とは何か、ダヴァンツァーティによるその定義を見よう。

〈貨幣とは公的権威によって任意に鑄造され、また国民の同意によって万物の取引契約をより容易にするために、その価格および尺度たらしめられた金、銀、銅のことである。〉(Davanzati [3] 9 節)

この定義の意味を正確に伝えるために、ダヴァンツァーティは若干の注釈を加えた。

(i) なぜ金、銀、銅に限定するのか。——「国民がこの三種の金属を貨幣の素材として選択したからである。」(Davanzati [3] 9 節。) 仮に君主が他の素材を用いて貨幣をつくらしめ、それを流通せしめようとしても、それは自国の領域内で通用するにすぎず、また自国内でもやがて金、銀、銅を以て払い戻される手形として通用するにすぎない。つまり貨幣の素材としては、万人がそれをよるこんで受領する一般的受領可能性が必要条件であり、この条件を具備したもとして選ばれたのが金、銀、銅の三種である。

〈ウルピアヌス、ポンポニウスなど民法につうじた学者たちは金、銀、銅以外の貨幣はよくないことを明確に認めている。それゆえにこそ、マーク・アントニーは彼の犯した他の罪の中でも、とくに鉄を混じた品位の卑しい銀貨を鑄造したかどによって非難されたのであった。〉(Davanzati [3] 9 節)

(ii) なぜ公的権威によるのか。——貨幣の素材たる金属の純度を試験し、秤量し、品位量目を保証することは私的個人のなしえざるところで、ひとり「万人の父たる君主」の権威・信用によってのみ可能である。

(iii) 任意に鑄造され、とはいかなる意味か。——これは造幣奉行の一定の自由を意味する。つまり奉行は君主の定めた造幣の根本原則（品位量目など）に手をふれることはできないが、貨幣の形状や名称などに関する細則については、その裁量に委ねられるべきである。

(iv) 国民の同意によって、とはいかなる意味か。——金、銀、銅が貨幣の素材として選ばれたの

は、国民の同意によるものであり、これらの素材が「生まれながらにそのような特権を有するものではない」(Davanzati [3] 12 節) からである。つまり金、銀、銅の選択は、(i) で述べた普遍的な受領可能性など、貨幣の素材としての適合性を金、銀、銅に認め、同意した国民の意思による。

価値と欲望

貨幣は諸財の価格を測る尺度である。しかし、ウゴリーノ伯の命を 10 日つなぎとめうる卵が、何故にわずか半粒の金に値するにすぎないのか。同様に「自然の仔牛は金の仔牛よりもはるかに貴重である。だが価格においてははるかに劣る。」(Davanzati [3] 12 節。) 財と金、銀、銅との、あるいはより一般に財と財との相対的な交換比率を定める事情は何であるか。

くすべての人は幸福になるために労苦し、すべての欠乏と願望の充足にこの幸福を見出す。欠乏と願望に応えるために、この世のすべてのものは創られているのである。さてこれらすべてのものは国民の合意により、この世に生み出された金(銀、銅をも含む)のすべてに値する。すべての人はその欠乏と願望のすべてを満たすあらゆるものを買ひ、そして幸福を獲得するために、すべての金を熱烈に希求する。各部分は全体の本性に従う。したがって、人、都市、国の幸福のいかに多くがなんらかのものによって惹き起こされ、誘い出されるか、それはちょうどその度合で金や労働に値するのである。しかるにそれは願望、欠乏に応ずる度合によって幸福を惹き起こす、意志は食欲と快楽とにその尺度を求める。そして欲望はその尺度を自然、季節、気候および場所に、またものの卓越性、稀少性、潤沢性など常に変化してやまない要因に求めるのである。>(Davanzati [3] 13 節)

く人類はその虚栄心から、容器、宝石、彫像、絵画などのつまらぬ珍品に法外の値をつけてきた。それは彼らがこの品々の中にその代価として支払う量の金と同程度の満足を見出しているからにはかならない。>(Davanzati [3] 15 節)

ダヴァンツァーティの見解には、価値・価格を決定する基本的要因として、財の利用によって得られる主観的な欲望の強度＝効用が果たす重要な役割にアクセントをおく思想を鮮明に読みとることができであろう。実はこのような主観的な価値学説はダヴァンツァーティにとっては決して目新しいものではなかった。この思想はアリストテレス以来絶えまなく、とくにイタリアの思想界を潤しながら、ダヴァンツァーティの時代へと流れ着いた、古い思想の流れなのであった。13 世紀の聖トマス、15 世紀の聖アントニーノ、聖ベルナルディーノなど、学識に富むイタリアの僧侶たちの思想はみなこの流れに棹さすものであった。ダヴァンツァーティの『貨幣論講義』は 16 世紀の、漸く実業人をはじめとする俗界の論客たちが経済問題に活発な発言の機会をもとめ始めた時代の代

表的な作品というべきであろう。ダヴァンツァーティの主観的価値学説はさらに 100 年後の G・モントナーリ、200 年後の F・ガリアーニへと継承され、やがてフランスのチュルゴーやコンディアックを媒介に、経済学の近代的発展に重要な影響を与えたことは、既に幾度か他の機会に述べたとおりである。(丸山 [7] 第 4 章)

古い主観的価値学説に比べるならば、労働価値説あるいは生産費説などは、誰れの目にも生産者間の競争が明白となりつつあった、16・17 世紀の交わり以降の、はるかに新しい時代の産物といわねばならないのである。(高橋 [9] pp.328-329。)

貨幣数量説

国内にもたらされる貴金属の量、したがって貨幣量が増大すると、当初は人の欲望に強く作用する力を有した金、銀は漸次その力を弱めてくる(稀少性の欠落)。財と貨幣の交換比率は、両者それぞれの欲望充足能力によるものであるから、貨幣量の増加は一単位の財と交換される貨幣数量を増加させ、したがって物価の騰貴を誘発する。貨幣量と物価との、このような相関関係に着目したダヴァンツァーティの見解は、素朴な貨幣数量説と呼ぶことができる。ペルーなど南米の

くすべての金がヨーロッパへ搬入されるとすれば、それはやがて販路のない商品となるであろうから、われわれはより稀少性をもつ何物かを見つけて貨幣の素材とするか、もしくは古い物々交換の方法へ逆戻りせざるをえない。)(Davanzati [3] 15 節)

ダヴァンツァーティの観察によれば、1534 年以来、南米から一時に 1,600 万~1,800 万の金もたらされる一方、南米に(輸入代金として)戻される金は 100 万に満たないという、その結果、ヨーロッパの物価は三分の一以上騰貴したが、逆にその事実がまたヨーロッパにもたらされた金の増加の徽章であるとダヴァンツァーティは述べた。(Davanzati [3] 15 節。)

素朴な貨幣数量説は既にフランスの政治家 J・ボーダンが述べており、またダヴァンツァーティの講義に数年先立って上梓された、W. S. ジェントルマンと名のるイギリスの著者の、『種々なる人々の有する目下の不平の簡略なる検討』(1581)にもボーダンの影響を読みとることができる。あるいはダヴァンツァーティもまた、ボーダンに学ぶところがあったかと推測されるのである。

貨幣数量説は所謂ヒュームの原理の基礎を形づくり、貿易収支の長期的黒字を志向する重商主義への批判の根拠ともなった。つまり貿易収支の黒字は貴金属の流入を招き、それが国内物価を上昇せしめる(貨幣数量説)。物価の上昇は輸入を促進し、輸出を抑制して貿易収支を逆転せしめるという原理がこれである。W. S. ジェントルマンやトマス・マンはヒュームの出現を待つことなく明らかにこの原理を知っていたのであるが、ダヴァンツァーティの講義ではこの問題に触れるところがない。

貨幣の改鑄

もし仮に、金銀の不足や膨大な戦費の調達といった必要に迫られて、君主が貨幣の品位量目を落とす改鑄を行なったとしてみよう。それは経済にいかなる作用をもたらすか。

名目上1フローリンの金貨、あるいは1リラの銀貨に含まれる金、銀の量が減少するならば、それが明らかになったとき、貨幣価値は下落し、したがって物価は騰貴する。

名目価値は同じでも、代価として受け取る貨幣の実質が卑しくなっていれば、物価が騰貴しない限り、個人の財産や信用は傷つけられてゆくにちがいない。そればかりでなく、君主の税収もまたこの品位量目の落ちた貨幣で支払われるのであるから、真の財源は損われるのである。

くここにおいて君主は、自らに対していかに大きな損害を与えているかを感じしうるのであろう。なぜなら、君主はひとたびは貧しき民から貨幣の品位量目を落とした分だけ利得を獲得することができたものの、君主の収入は同じ鑄貨を以て受け取らざるをえないのであるから、以後永遠にその分を失うことになるのである。こうして無秩序と混乱が生じる。〉(Davanzati [3] 20 節)

貨幣制度の変更が公明正大に行なわれる限り、経済が蒙る実質上の損害はない。しかしそれが秘密裡に偽瞞的に、しかもたびたびなされる場合の被害は甚大であって、

くそれは都市の公共の噴井を泥土で汚し、呑むしろ毒を投ずる〉(Davanzati [3] 20 節)

に等しい悪事であると、ダヴァンツァーティは非難を加えた。

ダヴァンツァーティと異なり、ガリアーニは「危急存亡の秋」に限って貨幣の改鑄を認める立場を採っていることは記憶にとどめてよいであろう。(Galiani [4] II, pp.63-64.)

さらに金銀比価の変動がもたらす、信用上の混乱も描かれている。いまフローリン金貨の品位量目は元のままとし、リラ銀貨のそれが下落せしめられたため、元来、金貨1に対する銀貨7であった相対比価が崩れ、金貨1に対して銀貨12になったとする。改鑄が行なわれる以前に契約された1フローリンの貸借を考えてみよう。返済が改鑄後になされるとき、債務者は元のレートでは1フローリン＝7リラであることを根拠に、銀貨を以て7リラ支払おうとするであろう(利子は別とする)。しかし銀貨は品位量目が落ちているので、債権者の側は銀貨で12リラあるいは金貨で1フローリン支払うことを要求したいところであろう。ここに困難な紛争が生ずる。

悪貨対策

国内の品位量目の正しい貨幣が外国へ輸出され、それが鑄なおされて、品位量目の劣る貨幣とし

て戻ってくる場合がある。もしこの事態が続くならば国内の良貨はことごとく外国へ持ち去られ、国内は劣悪な貨幣で満たされることであろう。これに対処する策としてダヴァンツァーティの提唱する途はきわめて単純である。

〈悪化をすみやかに排除せしめよ。ただし正当なる思慮ある方法によって除去せよ。それにはある人を指定して悪貨を受領せしめ、いかなる利益、利潤もなしに正当なる価値を支払わせしめよ。〉
(Davanzati [3] 22 節)

担当官吏を定め、悪貨を良貨を以て価値どおりに買い取り回収せしめることが提案されているのであるが、ダヴァンツァーティの論述を補足し、次の二点に留意しておく必要がある。第一は、良貨が輸出せられ、悪貨に化して戻ってきた時点で、既に自国にはなんらかの損失が発生しており、それを事後的に回収することはできない。第二は、悪貨の回収を完全にするためには、良貨と悪貨とを容易に区別することができねばならないであろう。

同様に品位量目の劣る外国貨幣については、それに応じて為替レートを引き下げることによって、国内からの貴金属の流失を防ぐことができると考えられているが、これもまた外国貨幣の品位量目が明白に知られうるときに成り立つ議論であろう。

〈したがって、ルッカにせよ、いかなる他の都市にせよ、フィレンツェからその貨幣をすべからく取り去って、それを改鋳するなどということは起こらない。けだし交易はあらゆる方法によって平衡せしめられ、均等化を達するからである。〉(Davanzati [3] 23 節)

デモクリトスの眼

ダヴァンツァーティが悪貨回収のために述べた方策は、たしかに単純にすぎ、十分な成功は期待しえないかもしれない。貨幣の介在に伴う諸悪——たとえば偽造、独占、聖職売買、高利等々は枚挙にいとまない。だがそれは貨幣そのものの悪ではなく、それをを用いる人間の問題であり、貨幣は「卓越した発明」であるとダヴァンツァーティは述べている。

〈金への飢渴ほどそれに対する願望の強いものはほかになく、多くの邪悪の根源となるものもない。このことから、貨幣は著しく邪な発明であったと主張する者がある。… (中略) …私はエピクテトスとともにこう答えよう。すべてのものにはふたつの柄がある。そしてそれを良く使うこともできるし、まずい使い方もある。理性、医薬、法律は人類の破滅をもたらすものとしばしば非難される。しかしこれらはこの理由で国内において禁じられるであろうか。多くのものごとを見ると心の瞑想が破られるという理由で、すべての哲学者はデモクリトスのように眼をくりぬいてしまったであろうか。… (中略) …貨幣は卓越した発明であり、無限の善を行な

う道具である。それを悪用する者があるとすれば、とがめられ罰せられるべきものは貨幣にあらずして人間である。〉(Davanzati [3] 16 節)

(経済学部教授)

参 考 文 献

- [1] Cipolla, C. M., *Money in Sixteenth-Century Florence*, (University of California Press, Berkeley / Los Angeles / London) 1989.
- [2] ダンテ, A. 『神曲』平川祐弘訳 (河出書房) 昭和 43 年。
- [3] Davanzati, B., *Lezione delle monete*, 1588. *Scritti classici italiani di economia politica, parte antica*, Tomo II, 1804 所収。英訳として *Discourse upon Coins*, translated by J. Toland, 1698. (慶應義塾図書館蔵)。
- [4] Galiani, F., *Della moneta*, (Presso Giuseppe Raimondi, Napoli) 1750. ここでは Quarta edizione, (Giovanni Silvestri, Milano) 1831 の二巻本を用いる。英訳として *On Money*, translated by P. R. Toscano, (University Microfilms International, Ann Arbor) 1977 がある。
- [5] Hutchison, T., *Before Adam Smith*, (Blackwell, Oxford) 1988.
- [6] Locke, J., *Some Considerations of the Consequences of the Lowering of Interest and Raising the Value of Money*, (A. and J. Churchill, London) 1692. ここでは P. H. Kelly の編集による *Locke on Money*, (Clarendon, Oxford) 1991, Vol.1 を用いる。
- [7] 丸山徹『ワルラスの肖像』(勁草書房) 平成 20 年。
- [8] Monroe, A. E., *Monetary Theory before Adam Smith*, (Harvard University Press, Cambridge) 1923.
- [9] 高橋誠一郎『重商主義経済学説研究』(改造社) 昭和 7 年。